

鹿兒島戰記 三編 上卷

核叟六郎繪



A420
3c

篠田仙果録

永島孟高画

繪本 鹿兒嶋戰記

東京

青成堂板

緒言

今般鹿兒嶋の事發る也都鄙の老若男女と云き
耳と側立唾と吞と吐顛末如何と待てり其
機を察して加賀屋の主人が童幼も解し
易きやう終迄この注文は内國新聞數十種より
抜章して數卷と爲しぬさるる速と音とほし
僅一夜の編纏たれば校正の暇もあらず只孟齋の
猛劣る毫と頼る書如くと云

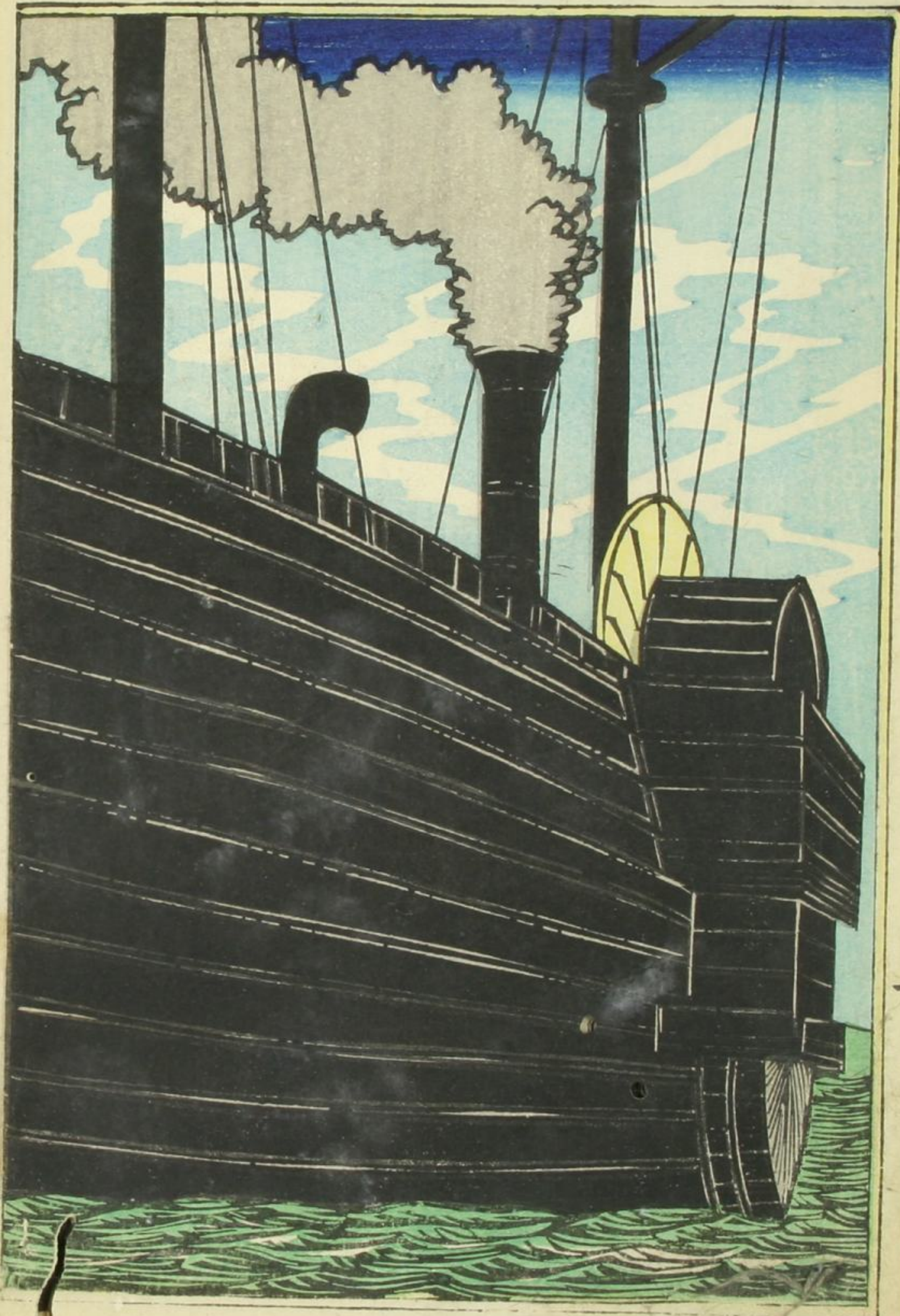
明治十年三月

篠田仙果

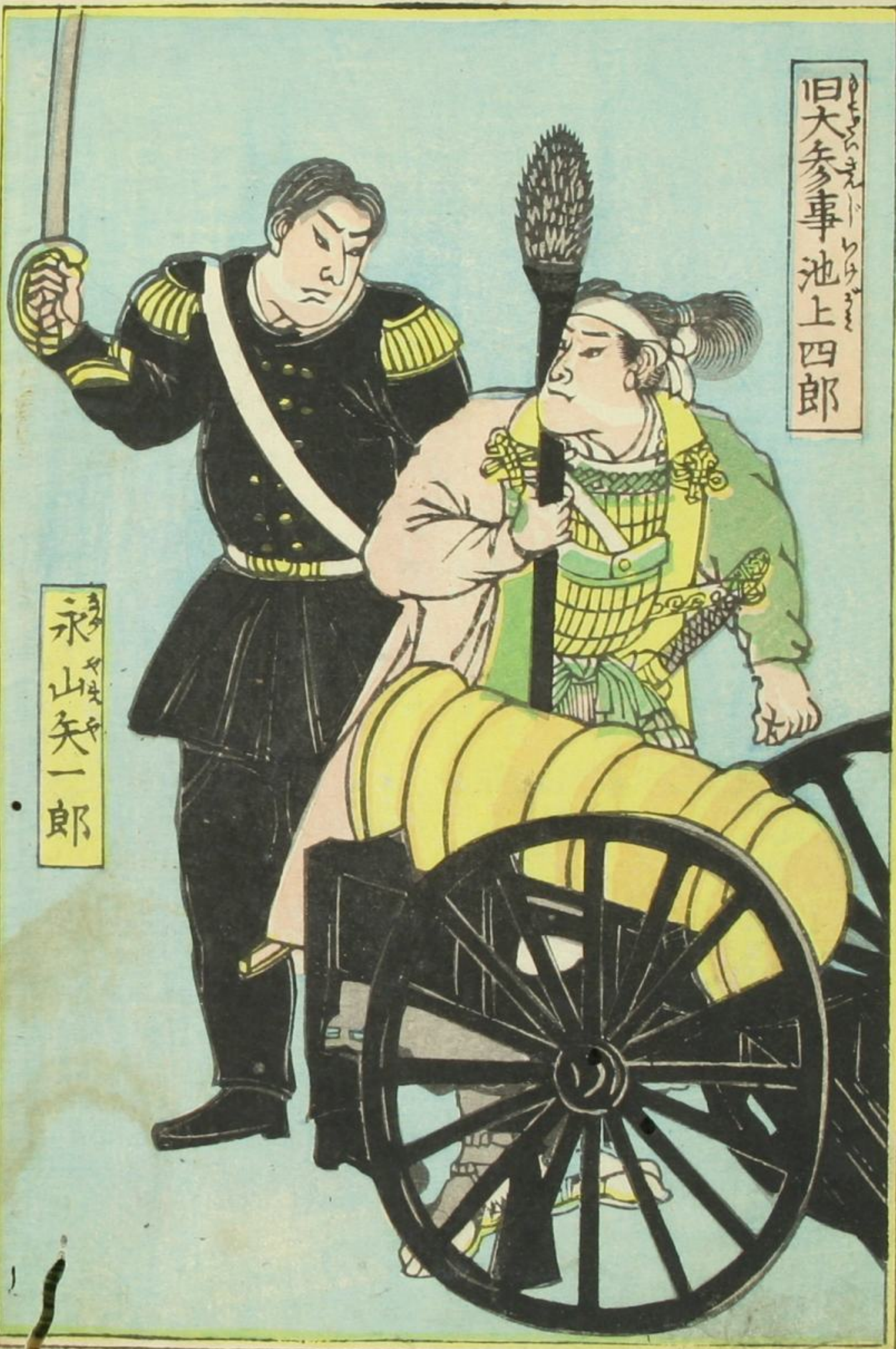


鹿兒嶋記

48-7869



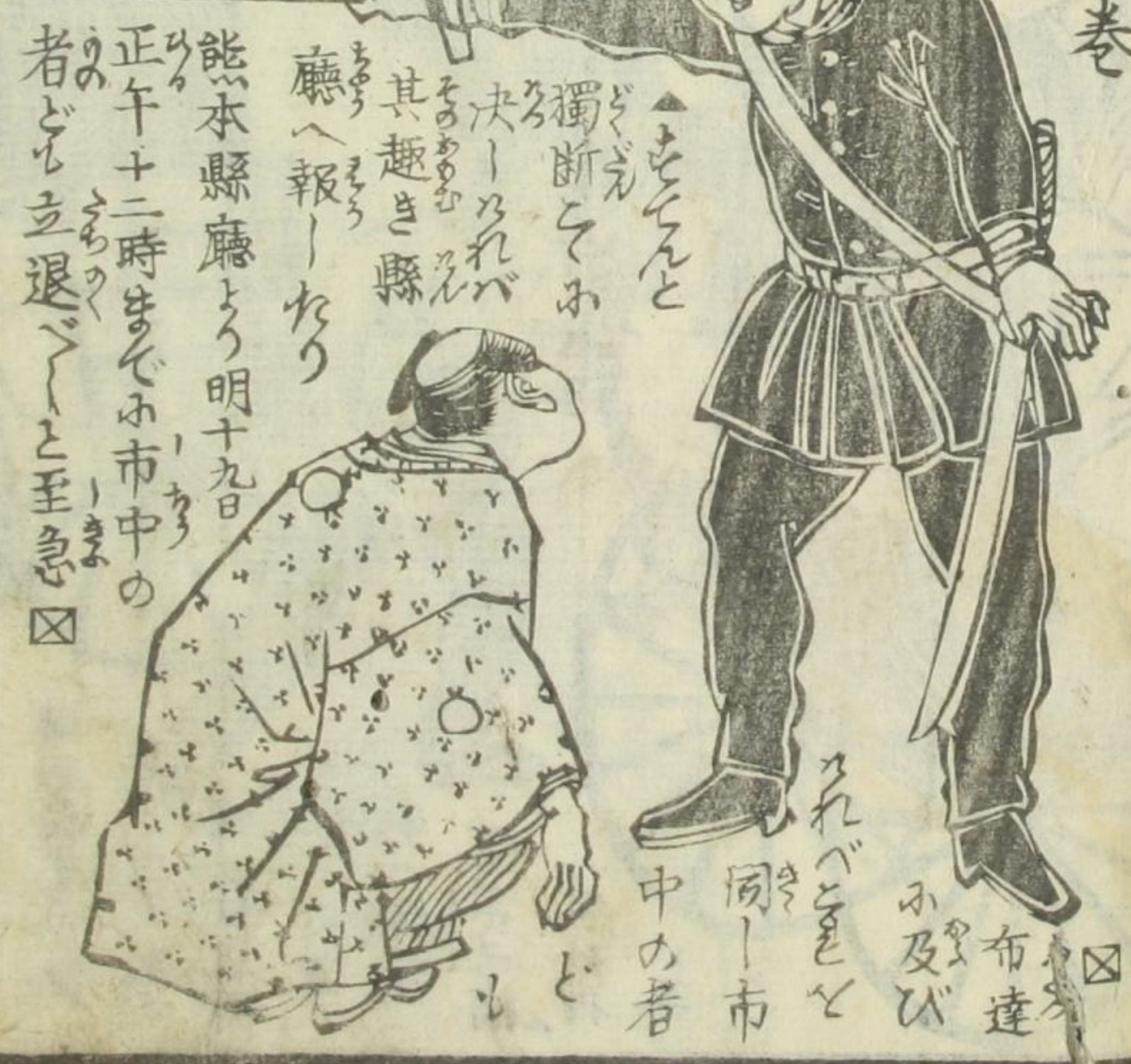
旧大参事池上四郎



永山矢一郎

鹿兒島戦記三編上之巻

東京 篠田仙果録
茲小熊本鎮臺の司令官
谷陸軍少将の鹿兒島の
暴徒ら人吉 水まき
両街道へ押出ししる
よし剛はしるが扱ひ暴徒ら
此処小迫り熊本城をせめ
落し根拠はまさん心と
ええええ然らば狭き場
所よての戦ひのつとも自在
るらばこれのあつて城下の
人家らび小本丸を焼



▲とてんと
獨断そめ
決りなれば
其趣き縣
廳へ報しなり
熊本縣廳より明十九日
正午十二時まふ市中の
者ども立退くと至急
布達
不及び
中者
同市

狼狽周章夫々あざむ
 雑具と荷ひ出さるも
 何れも包と負あて
 走るも老人杖よ
 ずり泣子の母小連れ
 丈ひく死男の走るも
 運きと恨と横太肉せ
 女子の轉がるかごをま
 ろふんと思つり実よ市
 中の混雑い男の沸ふ
 こころあざむ此より
 僥倖とほくのめい
 人力車と曳者どもあて



二の丸と
 櫓一ヶ所
 中へ坪井
 町安己搗
 (安政稿)
 残一又市



道の遠近みかづら
 一日の雇ひ料二四六七
 十銭の貧乏の者よ

てん人力車と頼
 がてくわど難美よ
 及び一巡査
 とれと厚く保護
 は貧者めい車の賃
 とあえ立退せしも
 多ふんありぬさそ二月
 十九日十二時三十分
 熊本城の本丸あざむ
 天守ホのさしす口



て凡千有余
 軒を焼
 兵を待
 ちの前編
 せしど籠城の

當りて三十余日の
蓄藏
とせしと

○扱又暴徒らが持舟の
迎陽丸野茂丸舞鶴丸
とて三艘の汽船あり

右の船もてきて
の物品の運送と

迎陽丸は大砲十二門弾薬
兵糧等つとて鹿兒島
港と出帆あり肥後の國

谷陸軍少将



日奈
久岬
海軍
省の

八代小入港一積一品の陸揚なり
猶弾薬兵糧と運送のため

島表へめど
んと肥前
の國天草沖



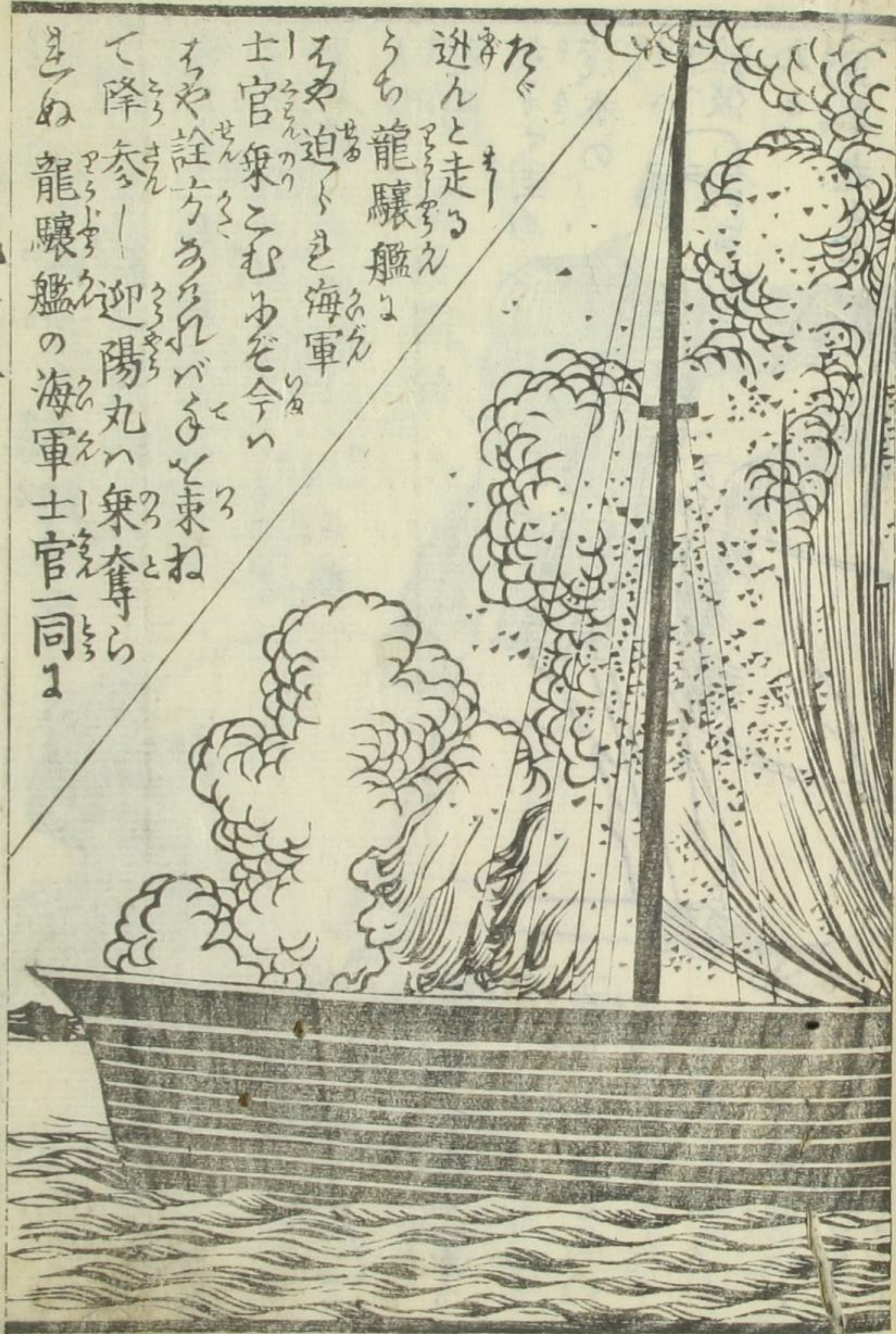
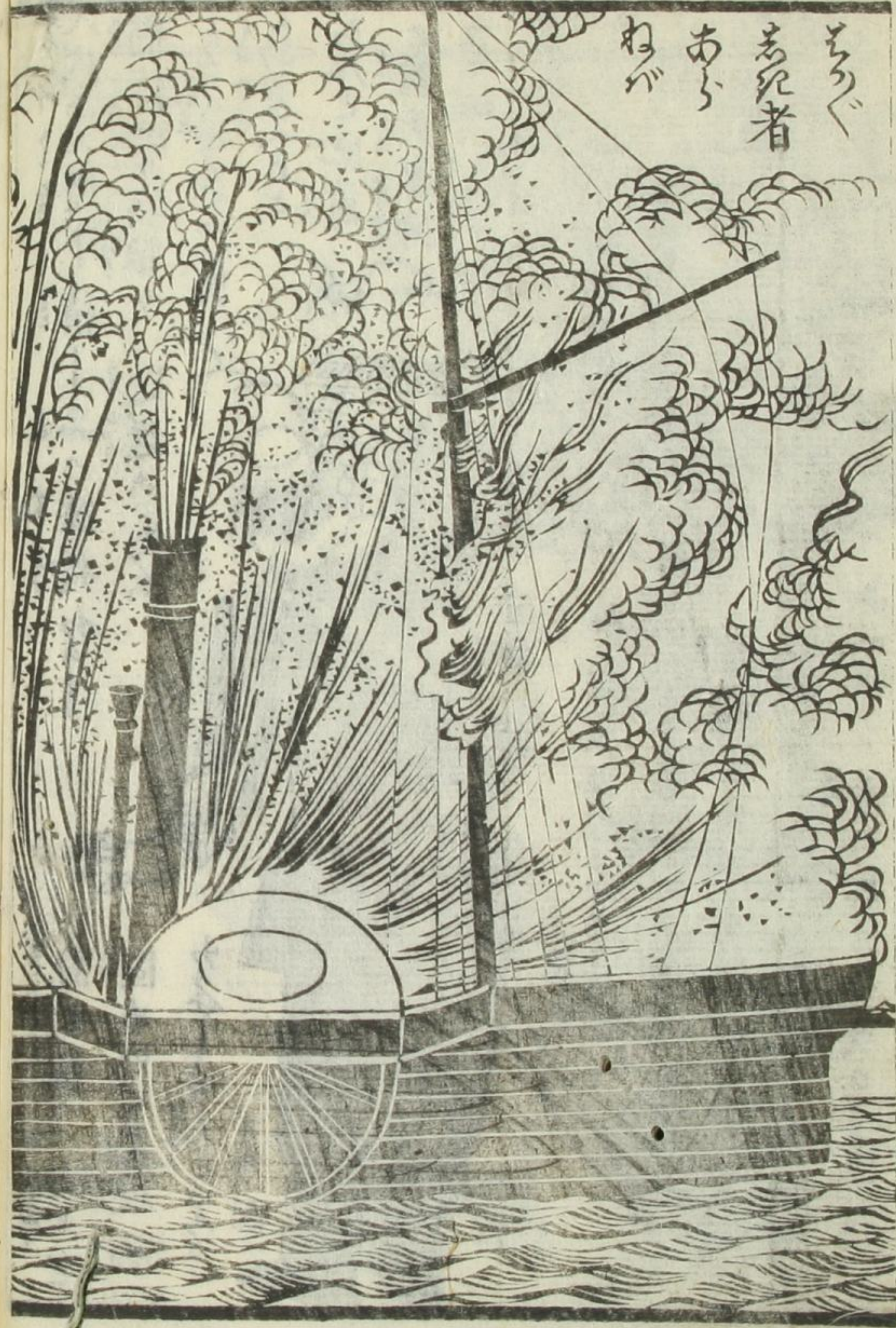
龍驤艦へ此海上と
固めの免破船

扱の賊

船とせんされそ追討

迎陽丸の跡を追ひつと大砲ハ
ふの者ハ船士水夫のし

まろく
まろ者
あふ
ねが



進んと走る
うの龍驤艦よ
そや迫くは海軍
士官乗こむを今い
そや詮方あらればよと東ね
て降参し迎陽丸へ乗奪ら
まぬ龍驤艦の海軍士官一同

勇進之野茂丸舞鶴丸の
二艘をも奪ひとり野茂丸の
焼をそく舞鶴丸の機関を
まづ物の役は立さるやうに
その後八代の海上の鳳翔艦

と右の
迎陽
篠原國幹

丸をて固め
茂木の
難波
丸と
金華丸もて



自陣
頭馬を進め最
激しく今と下せば
鹿見島をそのの
荒れ猛者た
一採は蹴り
うさんと鯨波を
つて押さ

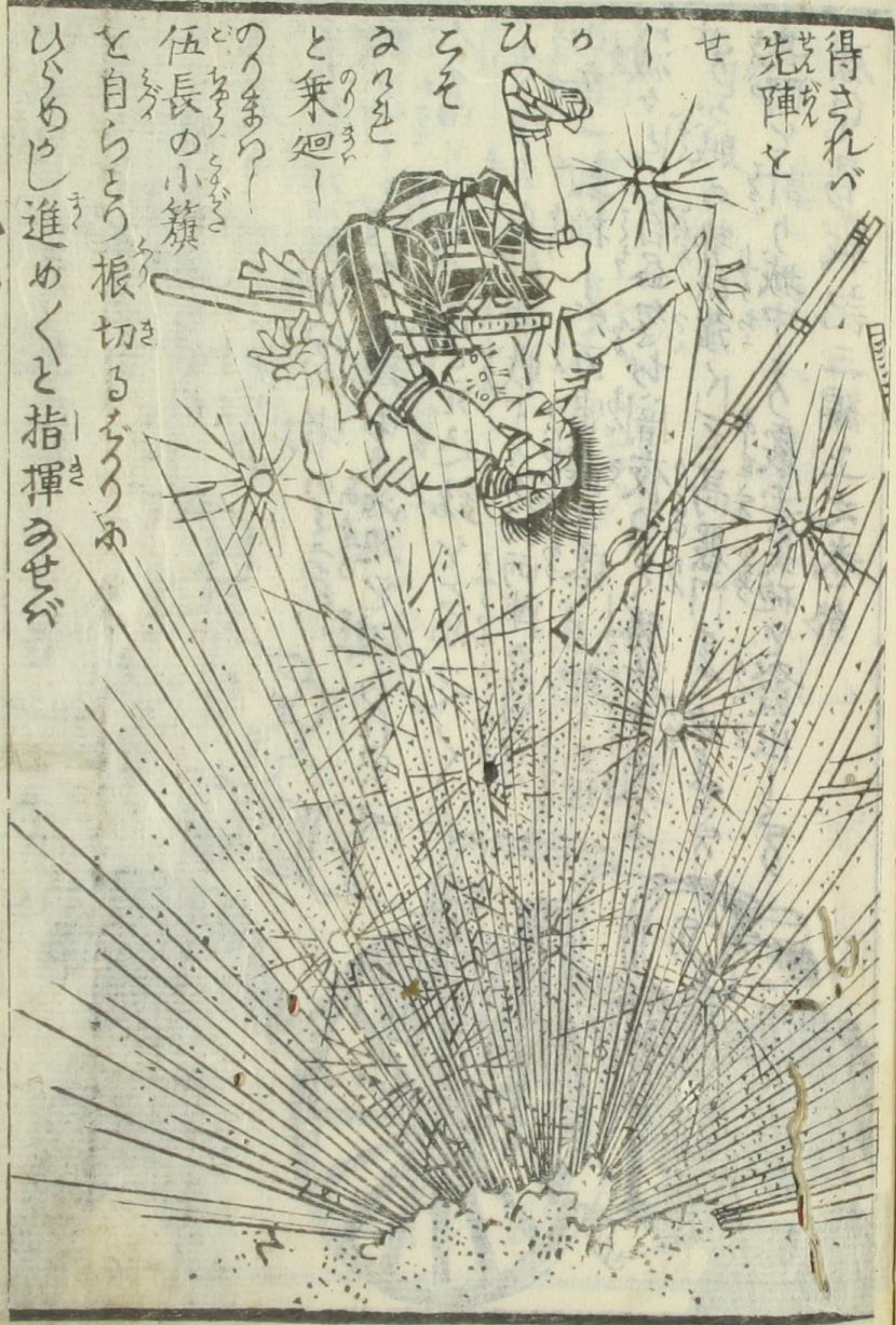
固めこれの
暴徒が
海上
通
路へ絶
○熊
本城
下
乱
暴徒
先陣
篠原
國幹



待
鎮基兵の
一の正兵之
向い一の
奇兵の裏
狭討んと
早
せ
原國幹



忽ち兵と三々分けて二々の兵ハ
前後ふあつて一々の兵ハ
虚とらるゝ以敵の横を討んと
其つけ別の自在なる
こ二千五百の兵
卒と我も
足の如く
あつて
ゆ
此処
破と
り



得されば
先陣と
せ
ひ
ろ
こ
ま
と乗廻
のりまの
伍長の小旗
と自らとり根切るをうりぬ
いづれし進めくと指揮せむ

鎮臺兵のいさう恐むば
薩州人とて鬼ありあり

まど敵の長途の勞れ
武者の味方の英氣と

養ひて地の理明る者
戦りかへハ分の理あり此処を破られ

人小面と合せしと元込銃ととめ久く

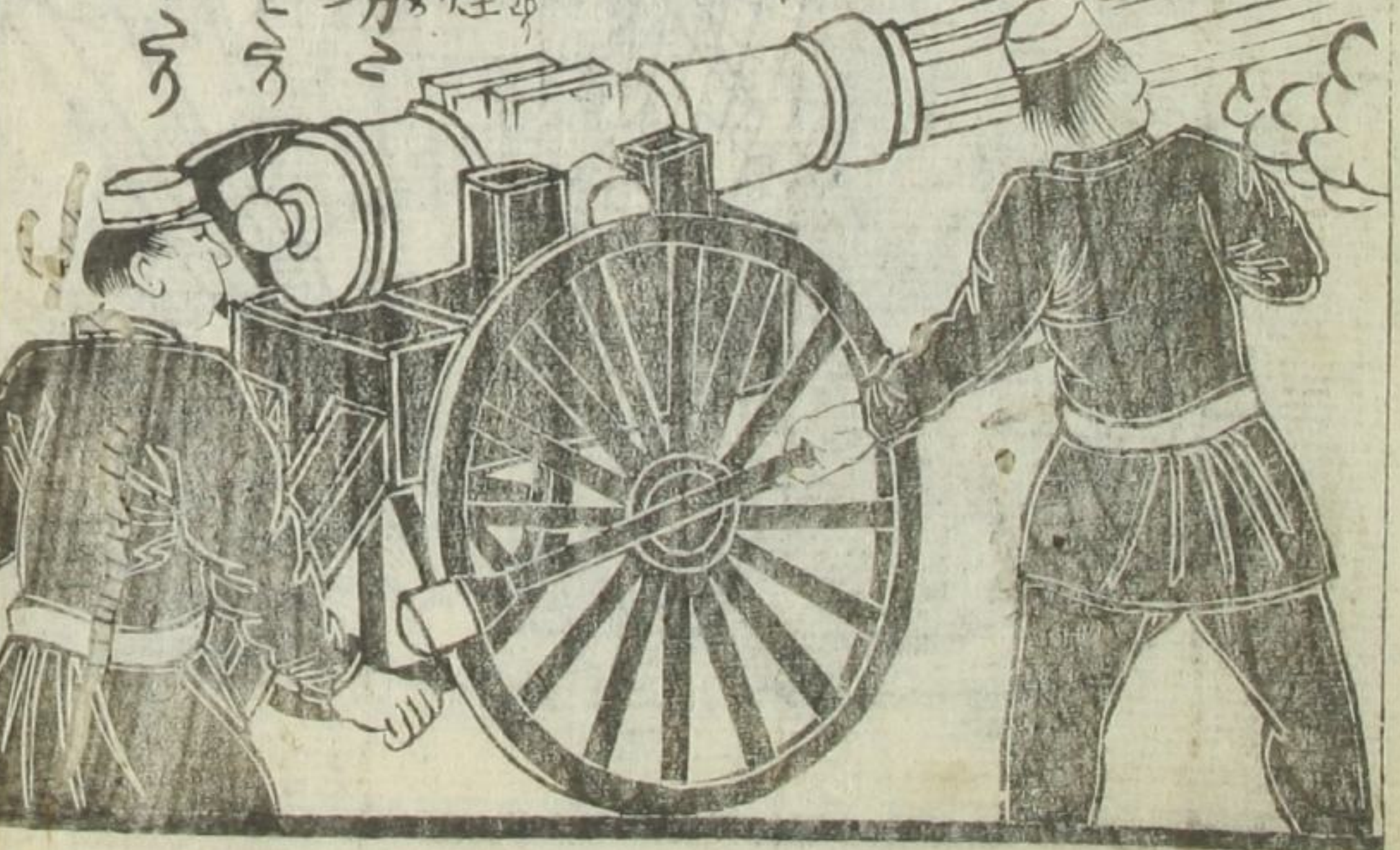
一歩も去らぬ激戦すこれに陣の筒音ハ

山岳も動揺しと万雷一時は落る如く玉煙

滅々として白益忽ち闇夜のどく勝敗更に分

ざりが賊の勢ひ強くて高麗門まで攻とせり

其図と計り城中より霰玉の大砲を發出し



繪本太豊記

永島益弁画
三編迄出版

繪本太閤記

切附本
同

画

新増本 西國奇談

為永春永
同
廿編マテ出版
画作

東京地本問屋

兩國米沢町二丁目

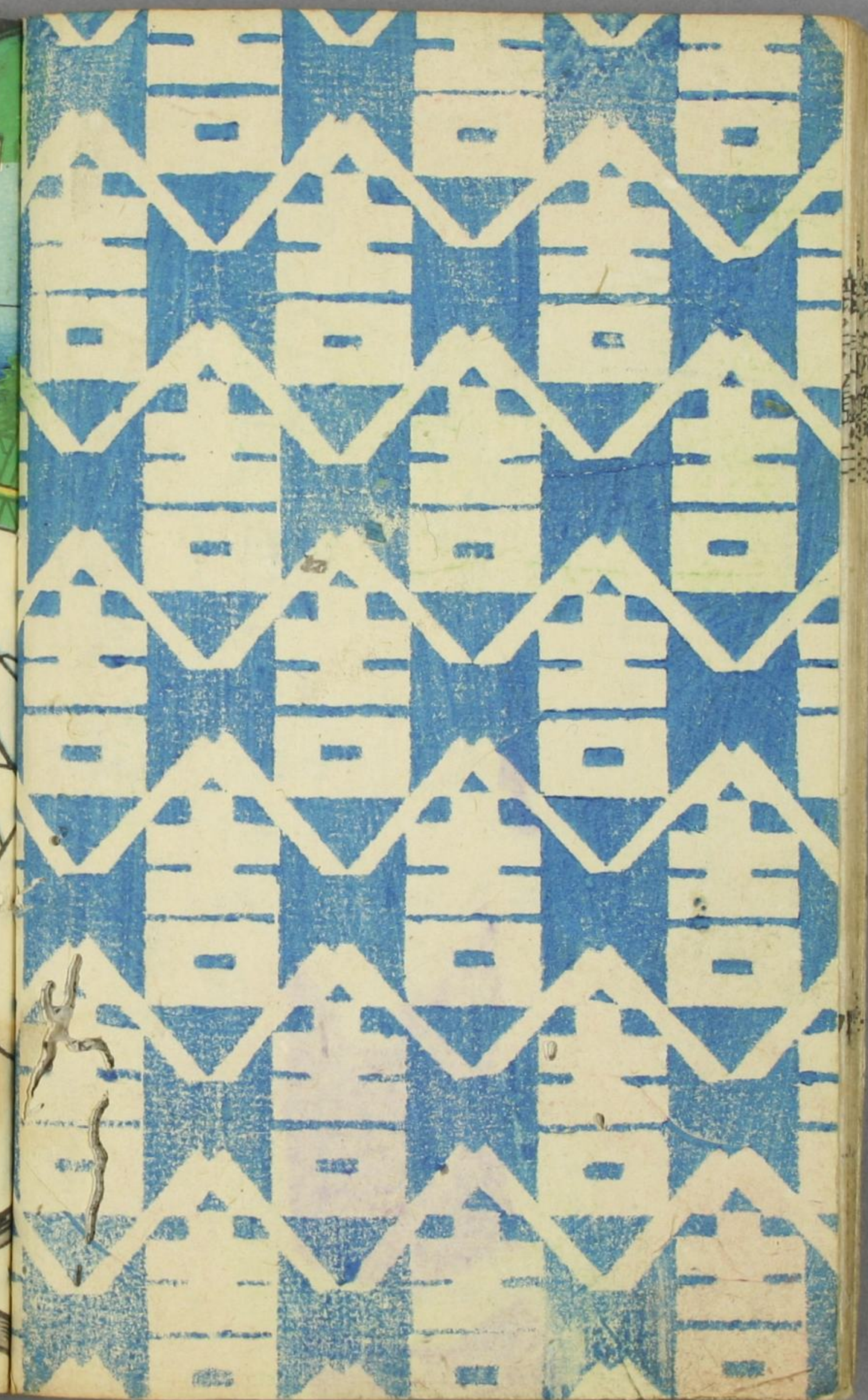
加賀屋吉兵衛

鹿兒島戰記 三編 下卷

姻

藤田又次郎

郷隆盛本陣



篠田仙果録
永島子孟齋畫

繪本 鹿兒島戰記

東京書肆

青成堂版

繪本鹿兒島戰記三編下之卷

東京 篠田仙果録

茲小長崎より肥後海上を固め
 たる汽船清輝艦小築組より
 小笠原中尉の坂本少尉
 に向りて敵地の案内
 知らざれば百事味うこの
 不都合ありあつて今宵
 上陸し大隅地をこ
 窺つん此爰いふとあり
 りれば坂本少尉も小ひき
 とをらぬ拙者もとくよつて
 付しりあつてその準備せんと



水兵

あも申
あく先
廿二日
午後五時

大隅の
國小島まで

清輝艦より
端舟とあり

小笠原
中尉

坂本
少尉

▲ひとくと水際
小漕あせ上陸
あつて彼方
此方とやうす

を伺ふ
その折

も

☒ 傍る塩焼小屋にて呼子の
笛のきこえありて清輝艦
めひと

めひと



小笠原中尉

水兵

十二
名衆

あり

さくハ敵
も用意
あること

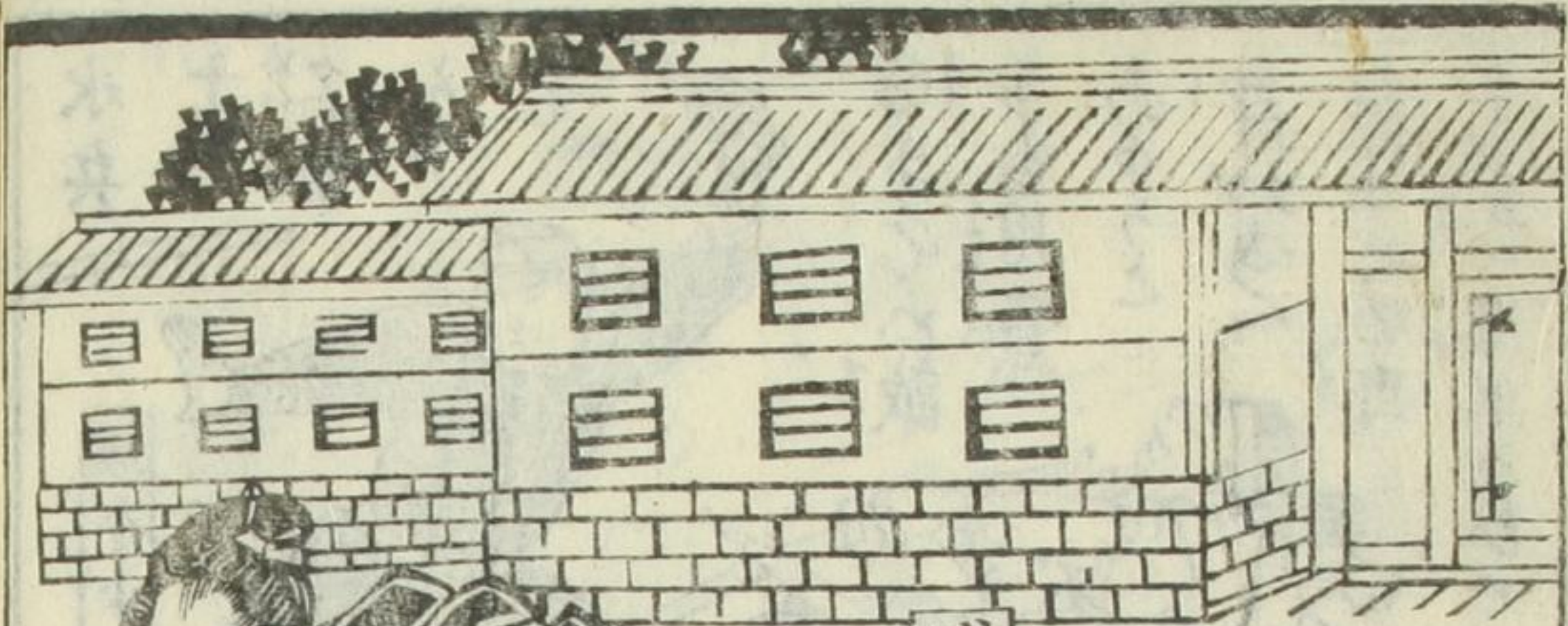
身がた
あつての折

あつての折
あつての折

あつての折
あつての折

坂本少尉





木小家よりその勢凡そ二三十名むらぐくと頭二
の一人やと追とり巻声々々、呼りつゝわねて濱手
と警備の我々網と張りしと心付ばううく
来りし轍のふふ人ひとりも洩さずかかめ
これと八方より討てかゝる此方
も一生懸命と

伏見奉行邸

桐野利秋



サハハルらあり
戦ひーがらう
あも

○履めて蹴かき
一方とらち破り水艦へ
戻りしが坂本少尉も
もつて働らぬ敵四五
人を討とりし其身
も薄疵を受られ
傍ある山ありけり
行方あるはよありに
けり水兵八名も生死
存亡さし小舟つゞ水際
小繫ぎし端舟の敵の為と奪

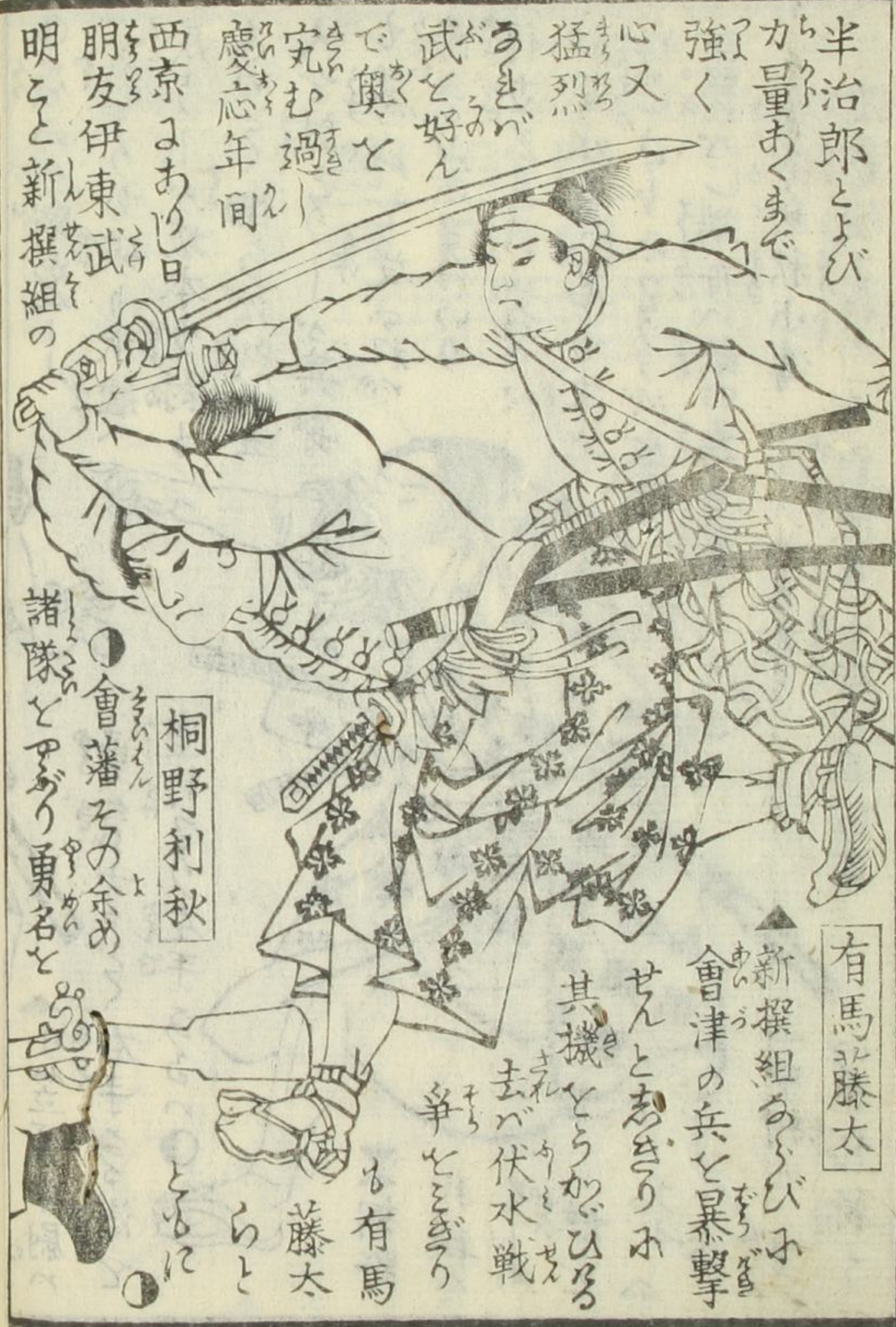
○桐野利秋小傳
今度暴徒三將の一人前陸軍少将正五位



勇気するごとく右手なる漢と
空竹つり左手あるい○
小笠原中尉の
右手なる漢と

△中村と
の俗稱と

△桐野
利秋の
姓と



半治郎とよび

力量あくま

強く

心又

猛烈

武と好ん

で奥と

究む過

慶忘年間

西京あり日

朋友伊東武

明と新撰組の

有馬藤太

新撰組あびふ

會津の兵と暴撃

せんとおきりふ

其機とらかひる

去伏水戦

争とまきり

有馬

藤太

らと

とらに

桐野利秋

會藩その余め

諸隊とまきり勇名と

近藤勇は暗殺

されしと聞あひ

美のちめゆ其あひ

報つんと同盟の士と

かたひ武明の弟と

かと添へ敵討と

関係せ入くと

伏水と

一時は東に

其のち東

國鎮征の

監とあり

軍



薩州

環内小潜

匿同所奉行や死小居と

あつ

あそ功と

野と

と

と

と

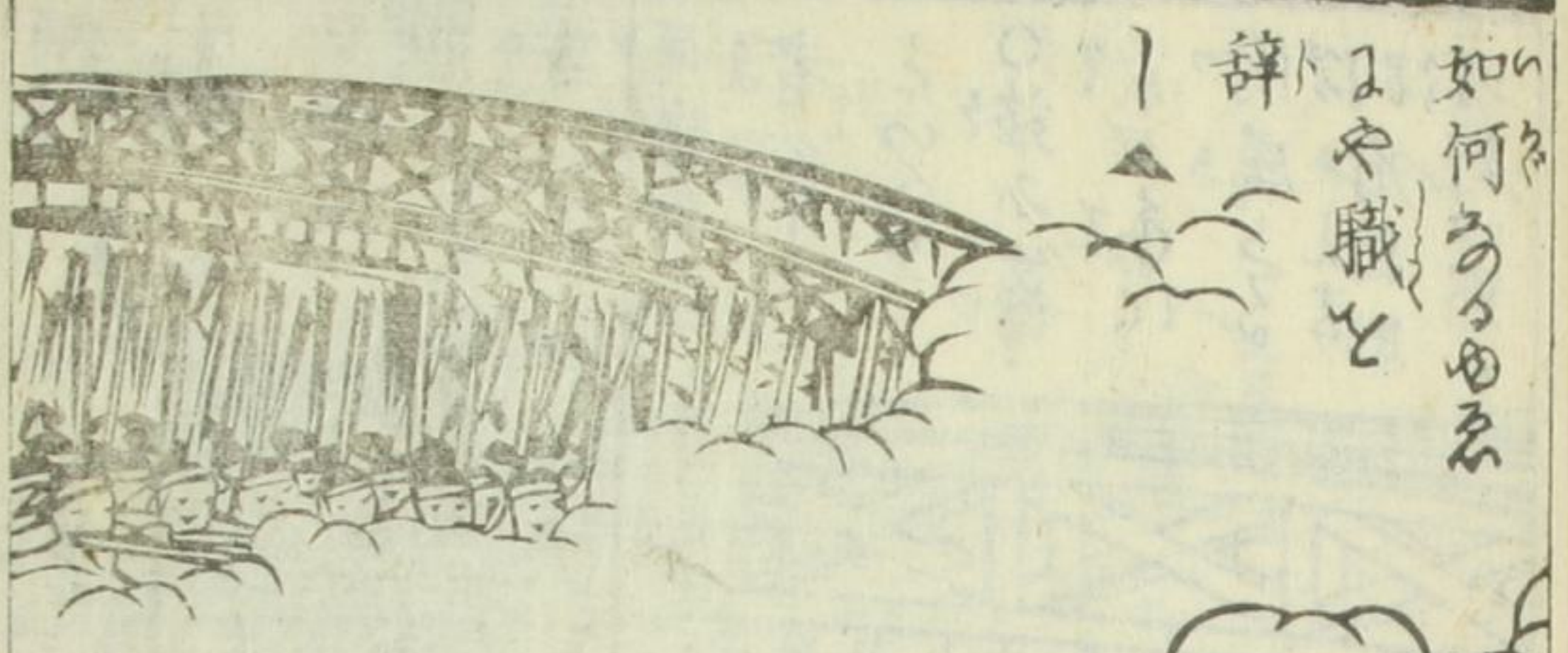
と

と

あつてのんぶ
會津若松の
城攻のころ
越後口より進んで
第一おんお
乗るも莫大
ある禪勲るれ
を然し正五位
み任ト軍吏
に長
みつり
陸軍少將
たりしが



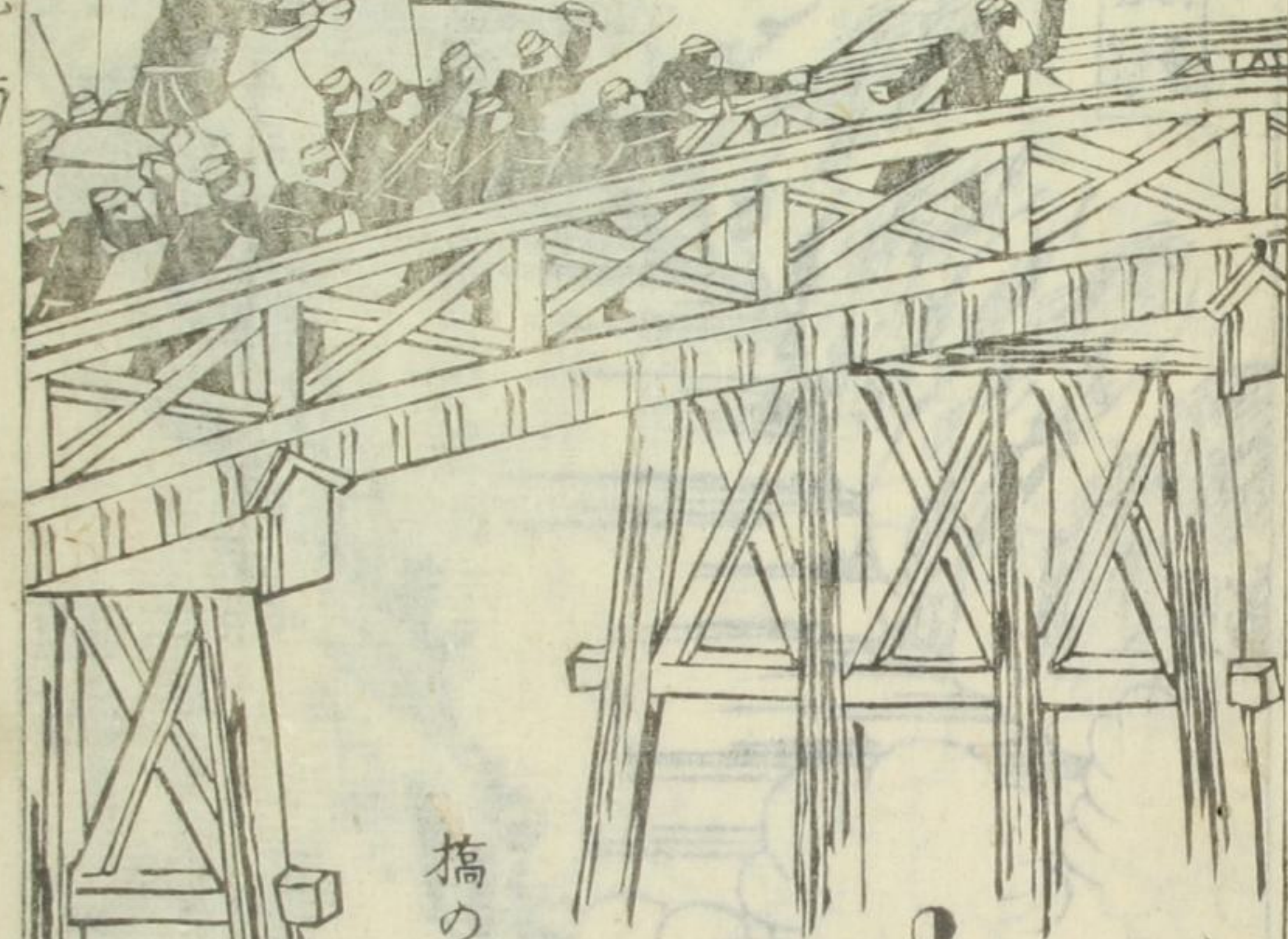
鹿兒島より
朝廷まへに召あへど



如何あるゆゑ
よや職と
辞し

かゝる辞しと出京
せびいし西の篠
原等と共に異平
の巨魁とありたり
○再び説高麗門まで
攻め世に篠原國幹一
の兵へ門内へ乱入せんと
下際をガク砲発せし
既に破れんとせし
出す弾丸地を落しとひと破列
数多のあはれ王八方へ飛乱
大なるあはれ篠原かくと
戦ひたればかく兵を引上て
息を休る

六百余人の
 暴徒と
 指揮し
 安己
 橋を
 らちこころ
 千反畑へ
 繰こんで
 此所へ出
 張せし
 鎮臺兵
 も備へて
 立て▲

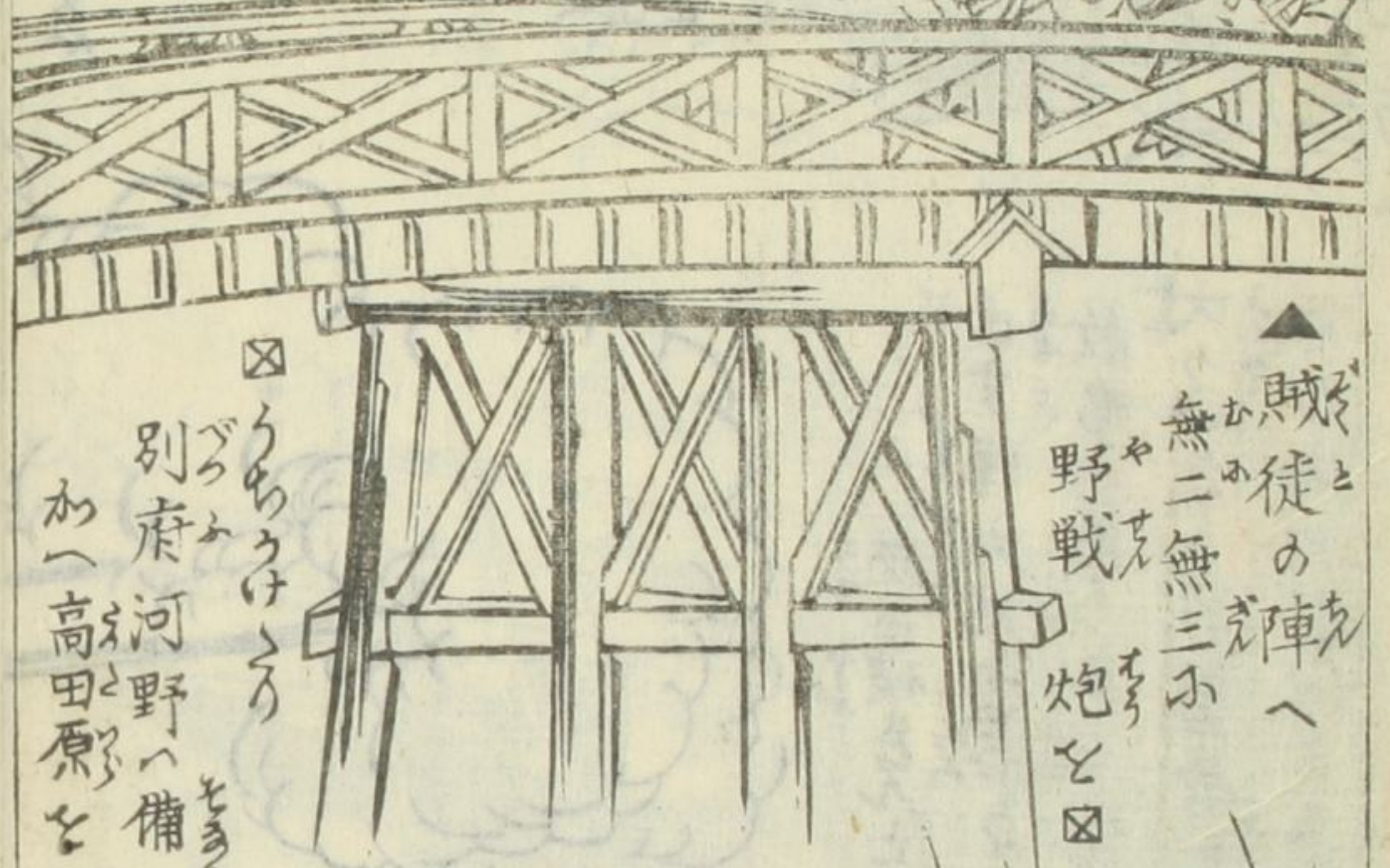


● 追つちられつゝ
 賊へ兎角浮足と
 橋のりとも心押つめ
 兵透ちあ
 せだ野戦砲と
 らちこそく

三

十日

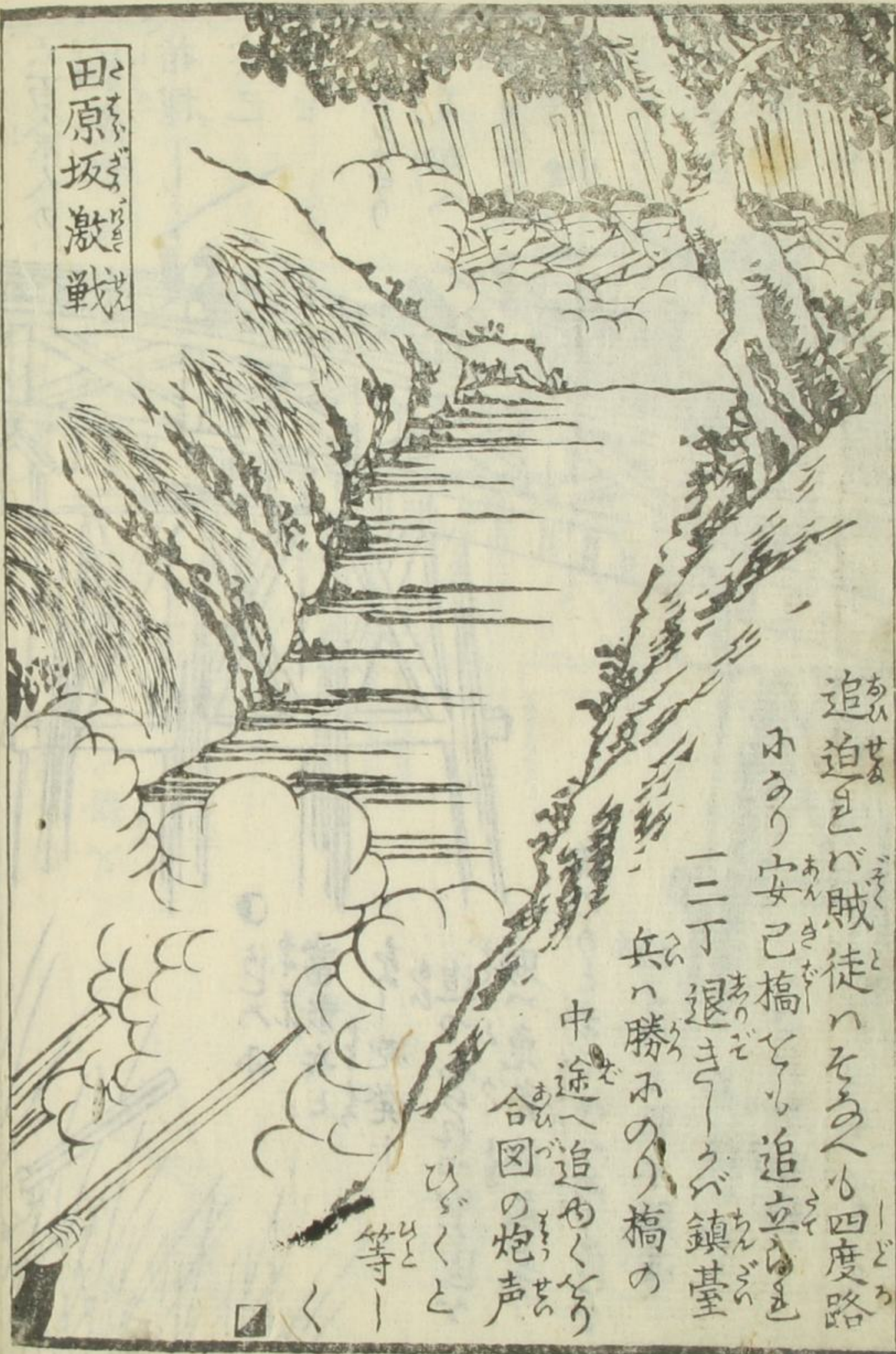
此時の戦ひ
 死傷の
 者多し
 とつろ
 〇 茲小篠
 原が子に
 附属する
 別府新助
 河野四郎の



▲ 賊徒の陣へ
 無二無三
 野戦砲と
 別府河野へ備と
 加へ高田原と

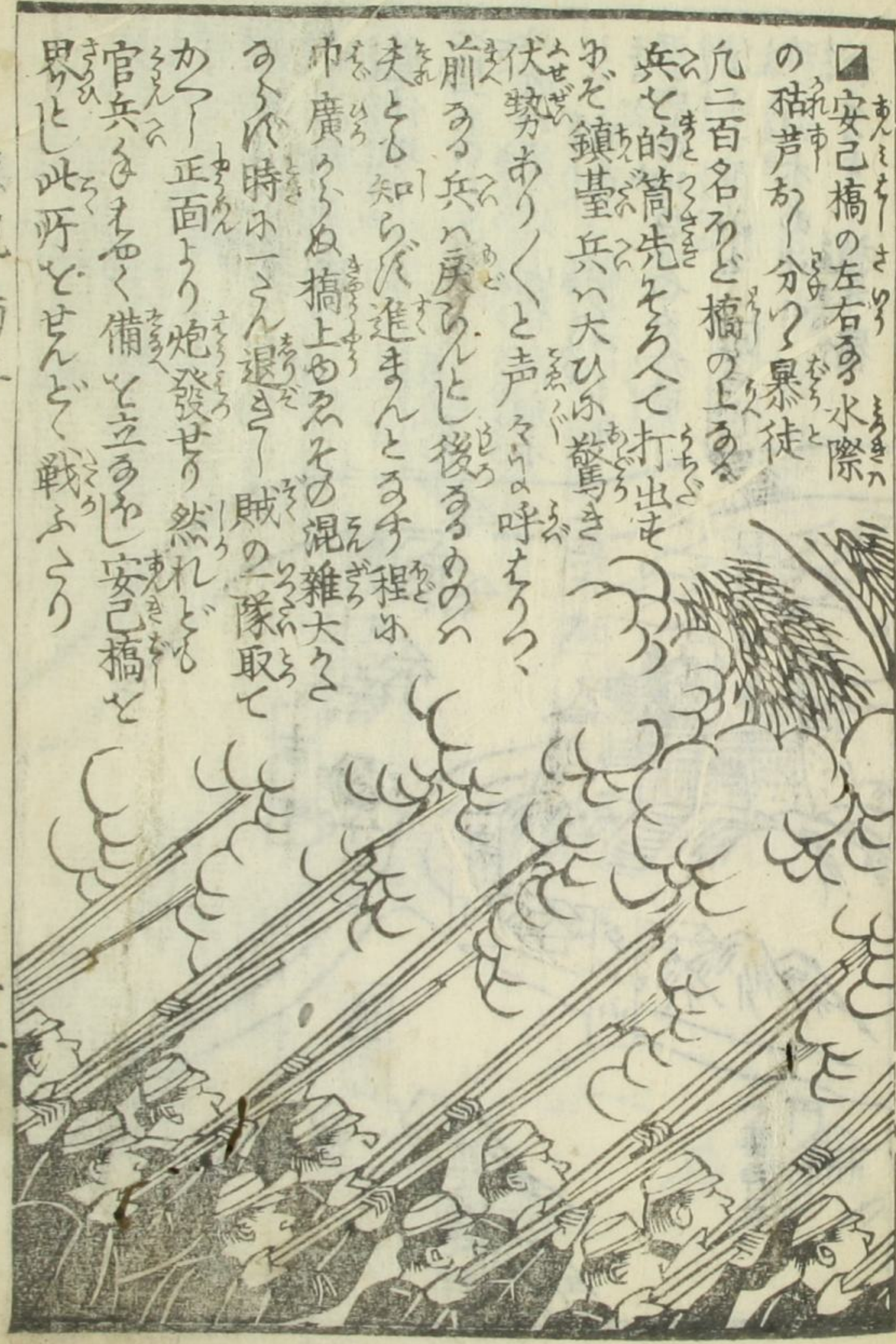
三

十日



田原坂激戦

追迫せし賊徒はそまへも四度路
小あり安己橋とも追立はる
一二丁退きし鎮臺
兵に勝みのり橋の
中途へ追ゆく
合図の炮声
ひくと
等一



安己橋の左右より水際
の枯芦あり分り暴徒
凡二百名あり橋の上
兵と的筒先をそめて打出せ
おぞ鎮臺兵に大ひに驚き
伏勢ありくと声々呼々
前より兵に戻りんと後より
夫とも知らぬ進まんとする程
中廣くぬ橋上をその混雑大
るる時一とん退きし賊の隊取
かへ正面より炮發せり然れども
官兵もよく備へ立るや安己橋と
界と此所とせんぞ戦ふなり

○肥後國 川尻

植木宿

西々本陣

熊本より筑

前筑後豊前

等への街道

道法城下より

二里ありあり

此所の菊地山鹿高瀬ホ

より攻める敵を防ぐ

要害の地なる也加藤

清正も陣山と

称へ樹木あま

植方より 植木宿

長六

唐人町

古町

熊本城

新町

十反畑

京町

出町

大久保

御馬下村

鹿子木村

植木宿

七本村

田原坂

花岡山

島崎村

如藤神社

丹山

本妙寺山

より七本村と

去る木の葉

町へ行く前

田原坂の嶮

あり賊徒の隊長村田新ハ

引率一植木宿へ繰出

田原坂の要害小臺場と

待けり福岡の分宮兵へ七本

村へとち寄り田原坂の

難所を互ひ鉄砲打出

戦ひ救刺及び

○茲は何者の仕業あるや大坂の

鹿野郡 三



玉江橋 京町橋 勸堂島 万字ヶ辻の

此繪の解ハ四編

四ヶ所へ張札と掲ぐるその文ハ

今般貧民救助の爲兵端と閑る

隨て諸税罪金

等の律と廢す

仍て今日より

安堵しと營業と守るべし

但此布紙と破捨する者ハ

正ニ嚴罰可申付也

新政大都督出張所

と認めしる〇 板熊本城南本〇口

高瀬ホの戦ハ次編ハ記す

繪本鹿島島戦記三編下編ハ



明治十年二月廿六日御届

仲丁成田千世下丁

定價六匁五厘

下谷上野町二丁目十二番地

編集人 竹條田久次郎

米沢町二丁目七番地

出版人 堤 吉兵衛

